

現代語……敬語

辻村敏樹

I 敬語の概念

〔1〕 敬語とは

一口に敬語と言っても、広義に解するのと狭義に解するのでは、その間にかなりの差があります。

前者に従う場合は、話し手・聞き手・話題の人物の間の上下親疎等の関係に基づいて変わる言語の形式のすべてをいうことになります。

これは人に対する待遇のしかたが言語表現に現われたものですから、待遇表現などとも呼ばれます。

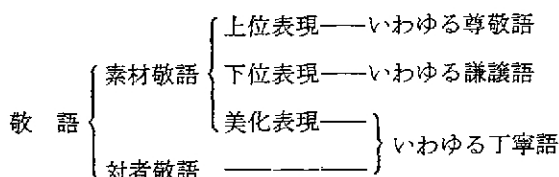
しかし一般にはもう少し狭い意味にとって、目上の人（また、関係の浅い人）に対する特定の物言いを敬語といっています。そして、ここでもこの狭い意味での敬語について述べることにします。

〔2〕 敬語の分類

敬語は最も一般的には次のような三つの種類に分けられます。

- （イ） 尊敬語＝目上の人（または、関係の浅い人）の動作・状態・所有物等をあがめていうことば
 - （ロ） 謙譲語＝話し手が自分乃至自分側の者の動作・状態・所有物等をへりくだっていうことば
 - （ハ） 丁寧語＝自他にかかわらず、すべて物言いを丁寧にすることば
- この三分法は明治以来久しい伝統を持つものと言えます。

しかし、ここでは次表のような分類を考えてみたいと思います。



まず、敬語を素材敬語と対者敬語に分けたのは、敬語には話の材料となる人や物、つまり素材について語ることばと、聞き手や読み手つまり対者に直接に敬意を表わすことばの二種類があると考えたからです。

次に、素材敬語中の上位表現とは、話の材料となる人、あるいはその人の動作・状態・所有物等を高いものとして遇する言い方で、「おっしゃる」「くださる」「おいしい」「ご邸宅」等一般に尊敬語といわれるものに相当します。

また、下位表現は、話の材料となる人、あるいはその人の動作・状態・所有物等を低いものとして遇する言い方で、「小生」「いたす」「さしあげる」「拙宅」等一般に謙讓語といわれるものに相当します。

これら上位表現・下位表現はともに、動作を意味することばの場合には、「くださる」「さしあげる」のように他と恩恵的關係を持つものとして表わされるか、「なさる」「いたす」のように他とは直接かかわりないものとして表現されるかによって再分することもできますが、ここでは省略に従います。

なお、一般の尊敬語・謙讓語の名称をとらなかったのは、それらが、話し手の尊敬ないし謙讓の気持を表わすものとしての名であるにかかわらず、実質は必ずしも名にかなうものとは考えられず、むしろ上下關係の認識を表わすに過ぎないと思われるからです。

それは現代人の敬語使用の意識を調べてみても容易にうなずけることですが、古く天皇が自らに尊敬語を用いたり、殿様が家来の動作を表わすのに「何といたした」というように謙讓語を用いたりしたことを考えてみてわかることです。

これらは天皇が自らを尊敬したのではなく、殿様が家来の謙讓を云々し

たのでもなく、ただ天皇は絶対的上位者であるとの自覚のもとに上位表現を使われ、殿様は家来が自分に対して下位者であるとの認識のもとに家来の行為を下位表現で表わしたにすぎないと解釈すべきだと思うのです。

とにかく、以上のような理由で、あまり一般的ではありませんが、上記のような術語を用いてみたわけです。

次に、素材敬語の中で最後に残った美化表現とは、上の二つのように上下関係の認識を表わすのではなく、ただ単に物言いを上品にするもので、「たべる」とか「お空」とかいった例がこれに相当します。

これらは、普通わたくしの言う対者敬語と一括して丁寧語と呼ばれるものです。そして上下関係の認識を表わすものでない点では確かに対者敬語と共通する面を持っているといえます。しかも、美化語に託されることばの上品さということは話し手自身の問題でありながら、一方に対者を意識したものである点でも対者敬語と相似た面を有します。それゆえこれらを一括して丁寧語とする通説にも十分存在理由はあるわけです。

ただ、対者敬語は常に相手に対してのみ用いられるのに反し、美化語は「おいしいごはんがたべたいなあ」のように、必ずしも相手を予測しないで用いることができます。この点で両者の間には、はっきりした一線を引くことができます。

対者敬語については、すでに上述の説明につきています。つまり、聞き手や読み手に対し直接に敬意を表わすことばで、「です」や「ます」がその代表です。

〔3〕 敬語の構成

敬語は、ことばの構成、組み立てという点から見ると、次のように分けられます。

- (イ) 特定語形＝普通の言い方に対し、それと異なった特定の言い方を
するもの
 (例) なさる(＝する) 申しあげる(＝言う)
- (ロ) 成分付加＝普通の語形に敬語的成分を付加するもの

- (a) 前に付けるもの
 (例) お体 拙文
- (b) あとに付けるもの
 (例) 山田さん 行かれる
- (c) 前とあとに付けるもの
 (例) お医者さま お読みになる

以上は、敬語でない語と対応する形についてのみ考えたものですが、実際の敬語は次に述べるように人的関係を反映して一層複雑な構成を持つことになります。

II 敬語の組み合わせと人的関係

敬語は上述のような種類と構成を持ちますが、これは話し手・聞き手・話題の人物それぞれの相互関係に基づいて種々雑多な組み合わせを構成します。

今、その一例を次に掲げる条件のもとに考えてみますと下表のようになります。

条件 1 a=話し手 b=聞き手 c=話題の人物① d=話題の人物②

条件 2 不等号 > の左辺が上位者、右辺が下位者を表示するものとする。
 (< の場合は、当然、左辺が下位者、右辺が上位者となる)

条件 3 c の d に対する授与行為についての言語形式を問題にする。

	人的関係 (1)	人的関係 (2)	語 形	組 み 合 わ せ
I	$a > c \cdot d$	$a > b$	やる	普通語
		$a < b$	やり-ます	普通語+対者敬語
II	$c > d \cdot a (b)$	$a > b$	くださる	上位
		$a < b$	ください-ます	上位+対者敬語
III	$d > c \cdot a (b)$	$a > b$	さしあげる	下位
		$a < b$	さしあげ-ます	下位+対者敬語
IV	$d > c > a (b)$	$a > b$	さしあげられる	下位+上位
		$a < b$	さしあげられ-ます	下位+上位+対者敬語

上の表について注意すべき点として、次のようなことを指摘しておきます。

- (イ) 「人的関係(1)」は素材敬語の現われ方を規定する関係であり、「人的関係(2)」は対者敬語の現われ方を規定するものである。
- (ロ) 「人的関係(1)」の項の〔・〕印はその左右の人物の上下関係はどうあってもよいことを示す。
- (ハ) 同じ項の(b)は、その位置にbが加われば、その関係での語形が一層確定的なものとなることを示す。

そこで、今かりに $a > b$ つまり話し手が聞き手より上であるという前提で、表の各段を見てみると次のようなことになります。

まず第一段は、話し手aが話題の人物c(この場合与える人)と話題の人物d(この場合与えられる人)のいずれよりも上位者であれば、cとdとの上下関係の如何にかかわらず「やる」ということばが用いられること、つまり、狭義の敬語は出て来ないということを示します。

これは、課長が二人の部下について語るような場合で、具体的な表現としては、たとえば「春川が夏山に本をやった。」といったような言い方になります。

第二段は、与える人cが与えられる人dおよび話し手aより上位者であれば、dとaとの上下関係の如何にかかわらず、素材敬語「くださる」が用いられることを示します。

これは第一段の場合と同様具体的な例で考えると「冬野部長が夏山に本をくださった。」というような表現になります。

なお、この場合、聞き手bがcより上位者だと、(つまり、上の例で聞き手が社長であったりすると)「くださる」という形が用いられないこともあり得ますが、 $c > b$ の関係においては上位表現「くださる」の使用は決定的となるので、(b)をd・aのあとに加えてあるわけです。

第三段は、与える人cおよび話し手aが、与えられる人dより下位者であれば、c・aの上下関係の如何にかかわらず、「さしあげる」という下位表現の現われることを示します。

この場合にあてはまる例としては、「春川が秋森常務に本をさしあげた。」といったような表現が考えられましょう。

なお、ここでも「さしあげる」という下位表現の出現を絶対的なものとするためには $d > b$ の関係が一枚加わる必要があるわけです。

第四段は、与える人 c が与えられる人 d より下位者で、同時に話し手 a より上位者という関係にある場合、前者の関係から「さしあげる」、後者の関係から「られる」という表現が現われて、結局「さしあげられる」という下位表現＋上位表現という組み合わせが現われることを示します。

この場合は、「秋森常務が社長に本をさしあげられた。」といった表現が考えられます。

なお、この表現においても聞き手 b が d や c よりも下位者であることがだめ押しの条件になることは第二段・第三段の場合と同様です。

なお、以上は最初に記しましたように、すべて $a > b$ の条件のもとで考えたことですから、逆に $a < b$ の関係では、語形欄各段の下欄の形、つまり「やります」(第一段)「くださいます」(第二段)「さしあげます」(第三段)「さしあげられます」(第四段)という表現となって、いずれも「組み合わせ」の欄に見られるような対者敬語の添った形になるわけです。

このように、敬語というものは、話し手・聞き手・話題の人物それぞれの関係如何によって複雑な変化をするものなので、その関係に正しく対応する的確な表現を用いるということが非常に大切になってきます。ところが、現実には敬語の種類や構成に関する知識の不足や誤解から、また知識はあっても対人関係への適用を誤ったりするところから、敬語の誤用や行きすぎなどの問題がしばしばおこってきます。そこで以下にはそういった敬語の使い方の問題についてふれてみたいと思います。

III 敬語の使い方の問題

〔1〕 敬語の誤用

(1) 種類から見た誤用

敬語の誤用には、種類についての認識の不足からおこる例が非常に多くあります。以下実例について見てみましょう。

例 1 黄色いしみがおつきになっていますね。

例 2 もう少し奥へおつめしてください。

例 3 ○○博士も申されました。

例 1 は、洗濯屋が洗い物を預かる時に言ったことばですが、「お——になる」という表現形式は、上位に遇すべき相手または第三者の動作を表わすことばです。ところが、しみがつくというのは相手の動作ではありませんから、明らかな誤用というべきです。

しかし、しみがついているのは相手の衣服であり、それは相手の一種の状態と考えられないこともないということから、ついこの表現を使ってしまったものと思われます。そして、上位表現の誤用にはこの種の例の非常に多いことが目をひきます。

○プリントは皆おわたりだと思いますが。

○皆様の税金も減られることでしょう。

○そのお席あいていらっしゃるんですか。

こういった表現は、すべて心理的に共通性のある上位表現の誤用といえます。

そういえば、近年電話のことばで、

○××さんのお宅でいらっしゃいますか。

という言い方を聞くことが多くなりましたが、これなども、正しくは「お宅でございますか」と対者敬語を用いるべきところだと思われます。

ただ言語というものは絶えず変化してやまないものであり、その「ございます」ということば自体、本来は「いらっしゃいます」にあたる意味のものであったのですから、これが、だんだん一般化して、「今日はよいお天気でいらっしゃいますね。」というような言い方が将来出て来ないとはだれも保証できないものと思います。

しかし、だからと言って、上述のような言い方をそのまま承認することは少なくとも現段階においては早計だと思われます。

次に、例2は、バスの車掌が乗客に言ったことばですが、「お——する」という言い方は、目下の者が目上のものに働きかける動作を表わすのに用いるべき形式であり、その意味では下位表現に属するものというべきです。それを乗客の動作を表わすのに使ったのですから、これも明らかな誤用です。

ただ、これを迎えて考えれば、恐らく話し手は「おつめ」で相手の「つめる」動作を敬し、それをするのだからというので、「おつめする」という言い方にしてしまったものと思われます。

この種の誤用も前述の例同様非常に多く見られます。同じく車掌の例の
○毎度御乗車いたしましてありがとうございます。
なども、「する」が「いたす」にかわっているだけで、基本的には全く同様のものです。その他、

○病気は何もいたしませんね。

○おつりいただきました？

○ぜひ一度拝見していただきたいと思ひまして。

等は、すべて上位表現をとるべきところを下位表現に誤ってしまった例です。

そして、それらを通して言えることは、恐らく、話し手の意識としてはあまり種類の相違というようなことは考えず、ただ敬語さえ使えばよいといった安易な気持ちに流されているところがあるように思われます。

ただ、「いたす」や「いただく」となると、

○あなたのお声がいたしましたから。

○コーヒーでもいただきましょうか。

といった例もあり、これらはすでに下位表現から美化表現へ移っていると考えられるものです。しかし、それでも後者の例など、わたくしならやはり「めしあがりませんか」と相手本位に上位表現をとるだろうと思います。

ところで、この種の表現と軌を一にするものに、例3の「○○博士も申されました」の例があります。

「申す」は本来目下の者が目上の者に向かって物を言うことですから、当

然下位表現に属するものと言えます。したがって上記のような表現に対しては敬語の誤用として退けるべきだとの意見が当然出て来るわけです。

ただ、この場合にも、「申す」は前記の「いたす」と同様美化語に移っていると見られないわけではなく、そうなれば、誤用というのはすこし手きびしすぎることになるかもしれません。しかし、それにしても「おっしゃる」という上位表現が立派に生きている以上、それに従う方が至当と考えられます。

結局、誤用か誤用でないかは、語の類別だけでなく、敬語そのものの変遷とも見比べて慎重に判断すべきものと言えましょう。

(2) 構成から見た誤用

敬語には、上のような意味的誤用ともいうべきものに対して、文法的な構成上の誤用もしばしば見られます。

例 1 高松宮殿下は本社工場を親しく御高覧されました。

例 2 当店の銘菓を賞味ください。

例 1 は、前項 (1) の例 1 と同様、まず「ご」をつけて「御高覧」とし、さらに、それに「する」の敬語「される」をつけたものと考えられます。しかし、現代語の上位表現に「ご——になる」はあっても「ご——される」という言い方はありません。その意味でこの例は誤りと言えます。

また、例 2 は「ご——くださる」という形式の「ご」を言い落としている点で誤りです。「くださる」だけでも敬意は表わせるわけですが、だからといって勝手にきまった形を変えることができないのが言語の慣習というものかと思えます。

この種の例にも、言語的知識の乏しさから来る「かしこまりました」とか「寒餅うけたまいます」とかいった例は少なくありません。新聞広告などによく見られる。

○お求めやすい値段になりました。

なども、「求めやすい」を複合形容詞としてその上に「お」をつけたと見れば誤りとは言えないかもしれませんが、客が求めることを言うのですから、

それは「お求める」ではなく、「お求めになる」であり、そのことが容易だという意味で「やすい」ということばを添える以上、「お求めやすい」ではなく「お求になりやすい」とある方が本来だと思われます。

(3) 文脈から見た誤用

例 1 どうぞルーレットを回して課題曲の選手をきめていただきます。

例 2 あの方が加わっていただいて助かりました。

「どうぞ」ということばは、「ください」に対応すべきものという意味で例 1 には文脈の乱れが認められます。「ください」のかわりに「いただきます」という言い方をすることは戦争中にすでに見られた表現ですが、意味的に両者が共通するところからおこった現象と言えましょう。ここは当然「おきめください」とか「きめてください」で結ぶべきものです。

例 2 も、「いただく」の例ですが、これはむしろ助詞の誤用と言えるかもしれません。とにかくこれは「あの方が」という主語の形で出発すべきではなく、「あの方に」と連用修飾表現を用いるべきところです。

もっとも、「あの方が」ではじめてのだからという観点からすれば、「いただいて」を「くださって」とすべきだということになります。その場合は文脈というよりは種類の問題にかかわります。

いずれにしても、(b) のままの形では、「あの方」が、だれかに「加わっていただき」たことになってしまいます。

〔2〕 敬語の行きすぎ

敬語の使い方の問題には、上述のような誤用のほかに、行きすぎの問題があります。

もっとも、どこまでが行きすぎで、どこからが誤用か、けじめのつかないような点もありますが、とにかく敬語を使うものの心底には、礼を失しないようにという気持があるため、ついそれが度をこして行きすぎた結果をもたらすものと思われます。

ところで、その行きすぎにも、いろいろな種類がありますが、代表的な

ものとして、次のようなものがあげられましょう。

(1) 重複

(例) お見えになられる 御芳名

これらは、すでに敬語であるものにさらに敬語を重ねたもので、いわば無用の長物ともいうべきものですが、この種の例も多く見られます。「お見えになられる」などは、本来「見える」だけでも敬語なのですから、三重敬語ということになってしまいます。「御芳名」なども「芳名」としてしまおうと、むしろぞんざいな感じを持つ人すらあるのではないかと思います。が、ここは思い切って「ご」を除いてしまった方が「芳」の敬語としての価値が生かされることになります。

(2) 乱用

(例) おパン たべけ

これらも、やたらに敬語にしさえすればよいという気持ちから生まれるものです。特に、なんでもかんでもやたらに「お」や「ご」をつけたがる傾向は女性に多いようですが、全部につければつけないと同じことになってしまうということを考えるべきだと思います。特に外来語など、あまりつける習慣のないものにまで乱用することはできるだけ避けたいものと思います。

それから、「食いけ」を「たべけ」というような類、これも乱用の一種ですが、これなど、「食う」ということばがぞんざいに感じられるようになってしまったところからおこったものと思われます。しかし、「くいけ」というのは別のことばで言えば食欲というのに相当する一つの語として固定しているものですから、これを「たべけ」と言うことはやはり慣習無視の言語的表現と言わざるを得ません。この種の例として「蚊にたべられる」とか「道草をたべる」とかいったたぐいの表現が若い女性のことばによく聞かれますが、こうした慣用的な言い方は、使うのならもとの形、それがいやなら全く別の表現をとるべきだと思います。

(3) 誇張

(例) 豚児 愚妻

これらは、中国の白髪三千丈式な誇大な表現で、実際に自分の子を豚にたとえる気などさらさらないし、「愚妻」といって人から相づちをうたれてもすれば、言った当人は憤慨するにきまっているのですから、全く形式的な表現でしかないわけです。そういう表現はやめるべきですし、上の例の場合など、「息子」とか「妻」とか本来の形で言えば、そのまま自分のそれを意味し得るのだということを改めて認識すべきだと思います。

{3} 敬語の不足

敬語というものは上述のように、なるべく丁寧にという気持から用いられるため、どちらかと言うと行きすぎの傾向になりやすいものですが、逆に不足の例もないわけではありません。ただし、乱暴なことばづかいの中に敬語が出て来ないのはあたりまえなので、ここでは、全体的には敬語的表現であるにかかわらず、当然用いられるべき敬語が用いられないといった例について少し述べてみたいと思います。

例 1 乗りましたら奥におつめください。

例 2 お乗りの方は降りる人がすむまで入り口を広くあけてお待ちください。

二例ともバスの車掌のことばですが、例 1 は、乗客に対し敬語不足と思われまふ。

この場合、相手に対して敬意を表わす「ます」ということばが用いられているのですから、これでよいと言え言えないこともありませんし、事実こうした表現は近年特に著しいようです。しかし、ここはやはり上位表現をも用いて「お乗りになりましたら」というのが正当な表現と言えまふよう。

例 2 は、不均衡な敬語用法ともいふべきもので、これでは、乗る人だけを重んじているように思われます。一方を「お乗りの方」と言えば他方は当然「お降りの方」と言いたいところです。ただし、口調の上でそれが言いくいとすれば、せめて「降りる方」とでもすれば釣合いがとれること

になりましょう。

〔4〕 話し側の事物につける「お(ご)」

次に敬語の中で、外国人などには非常に理解しにくいと思われる表現に、話し手が自分側の事物につける「お」や「ご」の問題があります。

「お」や「ご」は本来相手や第三者をあがめた気持で使うものだから、それを自分側の事物につけるのはおかしくないかということがしばしば言われます。しかし、たとえば

○お返事が遅れて申しわけございません。

というような場合、返事はたとえ自分の行為であっても、それは相手のためのもの、いずれ相手に属するものといった気持で用いられるので、矛盾はないわけです。こうした表現は昔からいくつも例を見ることができます。

そこで、昭和 27 年に文部省から出た「これからの敬語」でも、「お」「ご」をつけてよい場合の一つとして、「自分の物事ではあるが、相手の人に対する物事である関係上、それをつけることに慣用が固定している場合」というのをあげ、次のような例を列挙しています。

お手紙(お返事・ご返事)をさしあげましたが

お願い お礼 ご遠慮

ご報告いたします

ただ、ここで問題になるのは、一口に慣用の固定といっても、どこまでを慣用と認め、どこからは慣用と認められないというようなことは、一概にきめられないということです。たとえば、

私のご心配したとおり○○さんは大変なご立腹でした。

というような例だと、「ご——する」という表現がまだ新しいということもあって、抵抗が感じられるのに対し、同じ例でも「ご心配申しあげた」とあれば不自然ではないといったようなことがあります。

したがって、どうしようかとためらわれるような場合は、そうした表現はむしろ用いない方がよいと思います。

〔5〕 敬語と聞き手

最後に敬語は聞き手によって大きく左右されるという事実注目したいと思います。

たとえば、会社につとめているような場合、上役に向かって「部長どちらへお出かけですか」というように上位表現(及び対者敬語)をもって接するのは当然です。ところが、その部長に外から電話がかかって来たとか、来客があったとかいうような場合は、「部長はただ今外出していらっします。」などとは言えません。なぜなら、そういう言い方は部長をあがめたことにはなっても、外部の人にはかえって失礼になるからです。したがって、こういう場合は、当然「部長はただ今外出いたしております。」というように、下位表現をとらなければならないことになります。これと同じようなことは、もちろん、自分の親のことを人に話す場合などについても言えることです。

このように考えて来ると、話し手は敬語表現の決め手となるものとして、話題の人物と聞き手との関係を常に念頭においておかなければならないということになると思います。

わたくしが、II「敬語の組み合わせと人的関係」の項で掲げた表の「人的関係(1)」の欄で、(b)というのを特に設けたのも、こうした事情を考えたからにほかなりません。

更にまた、上記の事実に関連して言えば、敬語には上下関係のほかに親疎関係というものがあることが非常に重要な要素になるということも忘れてはならないことと思いますが、これまた最初に敬語の概念について述べたとき、「上下親疎の関係に基づいて変わる形式」と言い、「目上の人(また関係の浅い人)に対する特定の物言い」といったことと深く関連するわけです。

以上、敬語とはどういうものかということ、および敬語の使い方について現代のことばを中心に日ごろ考えていることの概略を申しました。なお、詳しくは、次のようなものを御覧いただければ幸いです。

敬語法(「国語国文学資料図解大事典」上巻)

1962. 11

- 敬語の分類について（「言語と文芸」5 卷 2 号） 1963. 3
ことばの使い方—敬語—（「日本文法講座」5 卷） 1958. 1

〔付〕 外国人の敬語の誤り

この講座は、外国人に日本語を教える方たちに、日本語というものをもう一回ふりかえって考えていただくために設けられたものであり、その意味での目的は上に申したことで一応達せられたかと思います。

しかし、実際に外国人が日本語を習得する場合に最も困難を感じるものの一つは敬語の使い方であると聞きますので、以下外国人の日本語作文の実例を二三とりあげて、分析してみることにいたします。

ただし、同じく外国人といっても、母国語が違えば当然誤用の性質なども異なって来ると思われますが、ここでは、一応そうしたこととあまり関係のなさそうな例を拾ってみました。

- 例 1 遊ぶの方、日本も一つ有名な国であり、きれいなすばらしい所はたくさんいらっしゃいます。
例 2 日本人の顔と皮膚を見て、だいたい中国人と同じが、習慣はぜんぜん違います。
例 3 かるいざわやかまくらや高山もいきました。みんなたいへんりっぱなです。
例 4 私は本当に日本は アジアの一番近代的な国ですね と思います。
例 5 コロンブス君は船の上に立っている。かれら、みなさん大変楽しかった。

例 1 は「ございます」と言うべきところを「いらっしゃいます」に誤ったもので、前述の「種類から見た誤り」に属しますが、これは事物についての敬語と人についてのそれとの相違を認識させることによって避けさせる誤りと言えましょう。

例 2 および例 3 はいずれも「です」の接続の問題ですが、例 2 については、動詞には原則として「ます」のつくこと、ただ例外として推量の言い方の時のみ「でしょう」という形のつくことを指摘すればよいと思います。

す。なお、この際、「違うだろう」とは言うが、「違うだ」とは言わないという事実と比較対照させることも一つの方法かと思われます。

例 3 は「美しい人：立派な人＝美しいです：x」という相対的な関係から類推されたものと思われます。形容詞といわゆる形容動詞とは意味的に共通するところから、上の類推はむしろ当然と言えます。

しかし、これは「山だ：立派だ＝山です：x」の関係において把握させるべきものと思われます。

例 4 は「です」が対者敬語としての性格上「ます」とともに常に相手に対する話しかけの場合にのみ用いられるもので、「と思う」とか、「と考える」とかというような思考内容そのものを示す場合には用いられないことを認識させることによって避けさせ得る誤りと思います。

最後に例 5 は、「みなさん」という敬語と「かれら」という非敬語を同格的表現に用いている点に問題があり、更に、普通呼びかけに用いる「皆さん」ということばを平叙文の中で使用している点にも問題があります。

もっとも、後者については、一方に、「皆さんおそろいでお出かけになりました」というような用法もあることから、一応目をつぶるとしても、依然前者は問題として残ります。そして、これに対しては、敬語非敬語の識別意識を確立させることが先決問題と考えられます。

以上、たまたま手にし得た手もとの資料から共通的な誤用例を選んでみましたが、そこには例 3 以下のように外国人だけに見られそうな表現と、例 1・例 2、特に例 2 のように日本人でも言いかねないと思われる表現とが見られます。

そこで、外国人に対しては、やはりまず前者のような誤りをおかさないように敬語表現の型をはっきり習得させ、次に敬語そのものの認識を深めることによって後者のような誤りをもまぬかれるように指導することが肝要かと思われます。

以上ほんの思いついたまを記しました。(1965. 7. 12)